

# クライストの『O侯爵夫人』

小 粥 良

ハイน์リッヒ・フォン・クライストの『O侯爵夫人』は1808年2月、クライスト自身が編集していた雑誌「フェーブス」に2回に分けて発表された。完成時期は遅くとも1807年の末と推測されている (Schmidt 197)。

この作品を通してクライストは何を訴えようとしたのか。筆者は一学期間(ドイツ語を履修したことの無い学生がほとんどだったので、英訳テキストを用いた授業ではあったが)この作品をテキストとして授業を行い、テキストの精読を通じて考察してみたが、むしろ謎は深まるばかりであった。授業においては、ヨッヘン・シュミットの解釈を参考にしながら、啓蒙主義的な女性の自立の物語として読むという方向を取ったのであるが、そうするうちに多くの疑問を抱かざるを得なかった。

この物語には、たしかにヨッヘン・シュミットが指摘するように、「偏見に対する批判、特に偏見によって固定された権威に対する批判」(Schmidt 200)が込められていて、政治と宗教の結託した支配制度に対する当てこすりと見える点が多々存在する。しかし、はたしてシュミットの言うように「クライストの叙述の第一の目標は、ひとりの女性の解放の物語を物語ること(注:点を付した部分は原文では斜字体)」(Schmidt 202)なのであろうか。そして、もしそうであるとしたら、それは啓蒙的理性による解放と言えるであろうか。これが筆者の抱いた最も大きな疑問である。

物語の中心は、むしろ、人間理性の限界の方にあるのではないか。開示されるのは「世界の脆い仕組み」(Kleist 49, 32-33)であり、それを克服するものは諦念であり、そこから立ち現れる寛容に基づいた赦しであると筆者には思われる。

## 1. 物語の演劇的構造

シュミットは『O侯爵夫人』の「分析劇」(あるいは「暴露の劇」)としての性格をめぐって、ソフォクレスの『オイディプス王』との構造的類比に言及し、この性格がクライストの喜劇『こわれ甕』の中により明確に現れていたもので

あり、そこでは真相解明のための法廷的な手続きという点に至るまで古典悲劇との一致が見られると指摘している (Schmidt 197 f.)。クライストの演劇が(たとえ喜劇と銘打たれているにせよ) 喜劇の特長と悲劇的特長の両方を併せ持っていることはジェフリー・L・サモンズの指摘するところであるが (Sammons 36)、そのことが、クライストの喜劇から、全ての紛糾を解決する大団円の後におとずれる曇りなき晴れがましさを奪っているように感じられる。なにか苦い後味が残るのである。

『O侯爵夫人』は、クライストの小説がもつ演劇的特長を最も明瞭に示した作品である。物語中の対話はほとんど間接話法で語られるが、対話の占める比重は非常に大きい。登場人物の内面は、対話、しぐさ、表情といった外面的なものの描写の中に間接的に暗示されることがほとんどである。たとえば、F伯爵の良心の葛藤は、彼の突飛な振る舞いや、何度も言及される赤面に(その描写は客観的でそっけないものであるが) 雄弁に現れている。問題の発生と紛糾、緊張と葛藤の高まり、そして解決へと向かう大筋は典型的に喜劇の構造を示している。

しかし、「分析劇」としての、冒頭での謎の提示と、劇の進行につれての漸次的な真実の解明というプロセスは、推理による真相の解明そのものを目的としてはおらず、真実は物語の始めの方で読者にはすぐにはっきりとわかってしまうので、冒頭の新聞広告で投げかけられる謎、つまり侯爵夫人の妊娠の経緯と、お腹の子の父親は誰かという謎は、ただ見せ掛けの謎に過ぎない。F伯爵が新聞広告に応じて下手人として登場する場面は、登場人物たち自身にとっては仰天すべき展開であるが、読者にとっては衝撃的ではなく、むしろ、登場人物の激しい感情的な反応の方に興をそそられる。

この時点を、『オイディプス王』におけるペリペテシア(逆転)としての真実の発見と比較してみると、その類似と相違に気づかされる。まず類似点から見ると、『オイディプス王』では、神話を熟知した古代ギリシャの観客は当然真実が何であるかを知っており、知っているからこそ、オイディプスの言葉に驕り(ヒュブリス)を感じ、同時に哀れを感じもするわけだが、そこに観客の知識と劇中の人物の知識との落差によって生じる劇的アイロニーの効果がある。ここに『O侯爵夫人』と類似した構造が見られるのだが、しかしその効果には相違がある。オイディプスにとっての隠された真実と、O侯爵夫人にとってのそれは、(レイプによる妊娠というのはもちろん悲惨なことであるが) かなり次元が異なっている。悲劇の世界を支配していた神々や運命といった観念は、

啓蒙主義の時代の読者にはもはや古代の観客にとってのような真実味をもってはいない。また、クライストが徹底して外面的で客観的な描写に努めているために、O侯爵夫人に対する感情移入は生じにくいと思われるので、読者によって予感される真実は、かなり茶番めいたものになる。真実の発見の瞬間そのものに向けての期待と緊張の高まりは生じず、劇的アイロニーはむしろ滑稽さを引き出している。良心の責めに苛まれ、恥辱に顔を赤らめるF伯爵の姿は、笑いを引き起こす。当事者の身になってみれば非常に深刻なはずの、家庭内の混乱と感情的爆発も、真実を知っているがゆえに距離感をもって観察している読者には、やはりかなり滑稽な場面の連続である。O侯爵夫人そのひとの苦悩の姿すら、肉体を振じらせ、倒れこみ、手を差し伸べる大仰な身振りが事細かに描きこまれば描きこまれるほど、余計に喜劇的に映じてしまう。気の毒ではあるが、所詮、真実はあの程度のもので、と思えてしまうからだ。もちろん、それと同時に、自分ももしこのような真実が見えない状況に置かれたとすればその不安はいかばかりか、という想像は刺激されるし、クライストの描写の迫真性は非常に説得力をもってはいる。また、問題になっている事柄が事柄だけに、優雅で丁寧な言い回しが続く会話も、(それが上品で悠長であればあるほど) 事の核心との落差によって滑稽味を増す。上品な作法が真相の露見を遅らせる。F伯爵はそれを打破しようとして、皆を哑然とさせるほど強引に婚約の話を進めようとするが、同時に、自らの犯した卑劣な行為に対する罪責感と恥じらいの念から、やはり肝心なところは(ほぼ告白しているも同然とはいえ)相手にわかるように明確には言えない。シュミットが言うように、真実の暴露の「遅延」が無ければ、この物語の緊張は生じえない(Schmidt 198)のであるから、構造上要請されているとも言えるが、しかし、この遅延そのものが滑稽さを醸し出している。それはやはり、彼を取り巻く貴族的で上品なマナーや自らの恥じらいの念に阻まれて、その真実の告白を目指しつつも達成できないF伯爵の姿に、既に事実を知っている読者が感じる劇的アイロニーの一種である。つまり、劇的アイロニーは『オイディプス王』やシェークスピアの『マクベス』におけるように悲劇的效果を高めるためにも用いられるが、『O侯爵夫人』の場合には喜劇的效果を高めるために用いられている。

## 2. 真実の暴露

『オイディプス王』という芝居を成立させている真実の暴露の構造と、それが呼び覚ます恐怖と憐憫によるカタルシスは、『O侯爵夫人』では変形し、カ

タルシスが本来の目的とはなっておらず、むしろ、本来は効果を高めるための補助的機能であったはずの劇的アイロニーそのものの方が目的化しているように思われる。

では、この物語は、素材の一つであったと言われるモンテーニュの『エッセー』の中の一挿話 (Montaigne 328 f.) のように、単なる笑い話のようなものかという、そうではない。(その要素も確かに存在しはするが。) この小説は、やはりある意味で、真剣に真実の暴露を目指している。しかし、それは「O侯爵夫人を孕ませたのは誰か?」とか、「どうやって孕ませたのか?」というような真実ではない。その真実は、世界に対する人間の認識に関わるものであり、そしてその点では、やはり『オイディプス王』に共通するものがあると思われる。

この物語の中に、「世界 (die Welt)」という言葉が繰り返し現れる。(場合によっては、「世間」という意味合いでも使われている。) O侯爵夫人は、夫の死後、実家の両親のもとに身を寄せ、世界/世間との交渉を絶って、隠遁者のような生活を送っている。

彼女は夫、O侯爵を、およそ3年前に亡くしていたが、それは彼が家族の仕事でパリへと向かった旅先でのことだった。彼女の母上、フォン・G夫人の願いによって、夫の死後、それまで住んでいたVの近郊の領地を去り、二人の子供を連れて、彼女の父である司令官の家へと戻ってきていた。ここで彼女は、それに続く年月を、芸術と、読書と、子供たちの教育と、両親の世話とにいそしみながら、大いなる隠遁の中に過ごしていた。(Kleist 3, 15-26)

世間と没交渉になったとしても、侯爵夫人は人間関係からまったく離脱したわけではなく、より濃密な狭い世界の中に身を置いているだけのことである。家族という狭い親密な世界の中で起こる激しい感情の動揺と爆発が、この小説の中で特に読み応えがある部分である。はじめは調和に満ちた平穩そのもの思っていた家族の関係が、娘の醜聞をきっかけにその真実を露呈し始める。以前は、婚約という自分の人生の重大事を考える際にも、侯爵夫人は「私は彼が気に入ってもいるし、気に入らなくもある。」(Kleist 19, 1) と曖昧なことを言い、家族の意見を求めていた。彼女は完全に家族に依存した存在と見え、明確な個を感じさせなかった (Schmidt 202)。しかし、主観性が交差する場とし

ての家族は、実は世界／世間の縮図である。(そこに近親相姦のとすら見える濃密な感情の連れ合いが見られる点では、特殊であるとはいえ。) 侯爵夫人はまず家族の中で個に目覚め、家族と対峙して自己を意識して後、初めてより大きな世間と向かい合う勇気を得る。

次第に事実を発見していく過程を、クライストは非常に巧みに描いている。身に覚えが無いのだから当然であるが、妊娠という事態を予想もしていない侯爵夫人は、妊娠初期の兆候をはじめは単なる体の不調と考えて冗談の種にしていた。漠とした不安から母の留守中に受けた医師の診断の結果に驚愕し、医師が悪意をもって自分を侮辱しているのだと思い激昂するが、自分の身体感覚は確かにその診断を裏付けているのではないかという不安がますます募ってくる。帰宅した母と言い争いになるが、結局、助産婦に見てもらうことになる。その結果、妊娠は紛うことなき事実と判明する。このように不条理(と本人からは見える)状況に投げ出され、極限の不安にさいなまれる侯爵夫人の姿が克明に描かれていく。自分自身の身体が、自分自身の意識を裏切る不気味な存在となる。彼女は自分の身体を含む全世界のわけのわからなさの中で、孤独の極みへと追いやられる。しかし、子供を奪われそうになり、それを阻止するために必死の行動を取るとき、自身の内側から思いがけない勇気が湧き上がってくるのを覚える。これは本能的なものかもしれないが、彼女の自己意識の誕生を告げている。

しかし、これは理性の誕生とは言えない。父親に勘当され家を出てからの彼女は、ますます隠遁的になり、錯誤を伴った過剰な主観性にはまり込んでいくように見える。

一番内奥に完全に引きこもってしまい、しゃにむに二人の子供たちの教育に身を捧げ、神が彼女に授け給うた三人目の子を完全なる母の愛をもって世話することを決意した。(Kleist 29, 23-28)

問題になる箇所はここからである。果たしてこの物語は、シュミットの言うように「カントの啓蒙主義に沿った成年の要請を充たす女性解放の成功の物語」と言えるであろうか。テキストをよく読めば、彼女を内奥への隠遁から引きずり出し、当時発達し始めていた新聞というメディアに広告を出すという大胆な行動を通して世間との交渉へと向かわせるものが、理性的な判断であるとは言いがたい。それは本能的に得られた個としての「自己意識」ではあるかもしれ

ないが、啓蒙的理性ではない。「ただし、カントの啓蒙主義に沿った成年の要請を充たす女性解放の成功の物語は、カントの言う行動への意識に通じているわけではない。反対に——自発的な——行動からひとつの意識が発展してくるのである。理論的洞察ではなく、ある実存的な驚愕、ここでは子供を奪われそうになり本能的に抵抗する母親のそれが解放に通じるのである。」(Schmidt 203) というシュミットの説明は、少し苦しくはないだろうか。シュミット自身、この箇所でも宗教的迷妄に陥っている侯爵夫人の精神状態を指摘している (Schmidt 204-5)。レイプの結果として生まれてくる赤ん坊が「他の人間よりも神聖な」(Kleist 30,7-8) はずはなく、これはその「起源」が侯爵夫人にとっては「謎」であるために色々と妄想めいた考えが浮かんでくるだけのことである。この子の父親を発見するために新聞広告を出すという決意も、この主観の錯誤から出てくる点は見逃せない。この神聖な子供が世間から汚らわしいもののように言われてはならないという思いが、ついに侯爵夫人に決心を促すのである。

ペーター・ホルンの解釈では、〇侯爵夫人の自己意識の形成は啓蒙主義よりもむしろ、プロテスタンティズムの影響の結果として生じた「内面化」(あのマックス・ウェーバーが『プロテスタンティズムの倫理と資本主義の精神』で指摘した「世俗内禁欲」のエートス) に結び付けられる (Horn 84)。自律的な自己とは、むしろ自己自身への厳しい監視の状態であり、それはまた他者への厳しさ、「完璧さ」への要求ともなることをホルンは指摘し、そこから侯爵夫人がなぜF伯爵に対してあれほど激昂し、なかなか赦すことができないのかを説明している。

つまり、彼女は人間を、したがってまた同様の存在としての自分自身を、信頼することができないので、人間に対して不可能な完璧さを要求し、この理想像からのいかなる逸脱も全くのしくじりとして非難するのである。(Horn 86)

ホルンは、このような内面性を支配する倫理的態度を、超自我というフロイトの精神分析理論の観点から理解しようとしている (Horn 87)。

この解釈はシュミットの解釈よりも説得力のある点が多々あるように思う。しかし、「自墮落な男なら覚悟していたが、まさか——悪魔とは！」(Kleist 47, 8-9) という時の侯爵夫人の激しい怒りに関しては納得できる説明であるとし

ても、その他の点でも全て合点がいくわけではない。まず、(北方の実話を南方という設定に移し変えたという主張がタイトルの下に書かれているにせよ)：イタリア人である侯爵夫人はカトリック教徒であり、その宗教的観念も非常にカトリック的である(聖者、天使等々への言及、また聖水を振り掛けるといった身振り)。引きこもって読書や刺繍をして暮らす様子は、いかにもドイツの敬虔主義的な内面性に通じるかもしれないが、その他には、さして強い宗教的性格を感じさせるような点は特に無い。プロテスタンティズムによって説明するのは無理があるように思われる。宗教的な問題は、サド＝マゾヒズムという観点からの説明を導入するための前置きに過ぎないのであろうが、余計ではないか。

しかしやはり、ホルンが無意識に着目している点は、大いに注目するべきであろう。というのも、O侯爵夫人の激しい怒りと拒絶は、それ以前にF伯爵が犯人であるという可能性を無意識のうちに完全に拒否していたことの裏返しとして現れている現象であり、ここには、精神分析の「否定 (die Verneinung)」という概念がある程度関係していると思われるからだ。この否定がなぜ生じたのかを考察することが、この物語の解釈にとっては重要なアプローチとなるであろう。敬虔主義的な内面化によって恒常化された自罰というマゾヒスティックな態度が、相手の非の発覚とともに今度は攻撃性に転じるというホルンの解釈の線に沿って考えれば、否定の原因は侯爵夫人の自虐的な態度(「自罰」)に求められ、その原因をさらに遡れば超自我の支配にあるということになると思うが、果たしてそれで正しいかどうか筆者には判断できない。筆者は精神分析の専門的な知識を持たないので、本稿においては、作品に描かれた外面的なものに即して、「否定」がどのように生じているかを観察することにとどめたい。

### 3. 否定

すでに劇的アイロニーとの関連で触れたように、読者にはあれほど容易にすぐさま察知できるというのに、O侯爵夫人とその家族は誰が犯人なのかにまったく気づかない。新聞広告に応じてF伯爵が犯人として登場するとき、彼らはみな仰天する。その中でも、O侯爵夫人の反応は、まったく異様で目立っている。家族はたしかに仰天し、動揺を示すが、彼女のような怒りと拒絶という反応は示さない。レイプの被害者たる彼女が怒るのは当然といえば当然であるが、しかし、彼女は不安や苦悩を乗り越えて、家族との葛藤も克服した後に、子供

を私生児にしないために、たとえどんな放蕩者であっても結婚しようという覚悟をもってこの対面に臨んだはずである。家族のもとを去ってからのあの隠遁生活の中で、子供のことがその謎めいた出自ゆえに神々しい存在のようにすら思っていたときでさえ、その父親のことは嫌悪すべき「社会の屑」と想像されていた。それでも結婚するという覚悟であった。しかし、伯爵が登場すると彼女は激昂して、彼を「悪魔」と呼ぶ。そして、悪魔から守ろうとするかのように家族に聖水を振りまいて、大急ぎで自室へ去る。一方、家族の方はというと、まず母親が「私たちはいったい（彼でなくて）誰を予想していたのでしょうか？」（Kleist 46, 18-19）と言う。父親もF伯爵を見てびっくりして顔が青ざめ、唇はチョークのように白くなり、睫毛をびくびくと痙攣させはするが、それでもF伯爵と冷静に翌日の結婚式のことを相談する。

家族が気づかなかったのは、まったく鈍感だったからに過ぎないのかもしれない。しかし、伯爵の突飛な言動の中にあれほどの手がかりがあったにもかかわらず、気がつかないのはひどく不自然である。いや、伯爵の行動が突飛すぎて呆然としてしまい、逆に注意を逸らされてしまったということは十分に考えられる。だが、論理的に推論すればそれが唯一の可能性であることは明白なのに、まったく想像すらされていないのだ。伯爵が貴族で、立派な人物だという「偏見」が、妨害となっているということも考えられる。あるいは、家族は娘への嫌疑とそれが引き起こす心理的葛藤にあまりにも気を取られ過ぎていて、単純な事実が見えなくなっているのかもしれない。家族の場合はそれでよいだろう。しかし、O侯爵夫人その人の場合は、どうであろうか。

フランスの映画監督エリック・ロメールは『O侯爵夫人』を細部に至るまでクライストのテキストに非常に忠実に映画化した（1976年）が、もちろん彼の解釈に基づいた大胆な処理がまったくなされていないわけではない。侯爵夫人の出した新聞広告に応じた犯人が自分の登場を予告する記事が新聞に載るが、その来訪の前日の家族が夕食を共にする場面に、ロメールは次のような原作には無い会話を挿入している。誰が現れるだろうかということが家族の話題となる。父親が、もしかしたらあの情熱的なF伯爵かもしれないと、ふと口にする。しかし、それを聞いた侯爵夫人は憤慨し、「黙って！あの方は、疑うことのできない唯一の男性よ」と声を荒立てて、部屋を出て行く。この挿入は、侯爵夫人の「否定」を際立たせるために行われているように思われる。もちろんこの「否定」は、クライスト自身のテキストの中に充分示唆されており、物語の結末での侯爵夫人の言葉に最も端的に表れているのであるが、この小さなやりと



りの挿入によって、それは観客にとってより明瞭なものとなっている。

○侯爵夫人は本当は誰が犯人か薄々わかっている、ただそれを認めたくないから頑強に否定しているのであろうか。いや、そうではないだろう。盲点というのは、そういうものではない。たとえうすすらとでも彼女が気づいていたのなら、彼女はあれほど傷つくことは無かつただろう。わかっているのに、ただ認めるのが嫌だから意識的に抵抗する、ということではない。人間には目の前にある明々白白たる事実が見えないということが生じるし、これは本当に見えていないのだ。見えているのに見えないと言って嘘をついているのではない。ポーの『盗まれた手紙』の中に現れる「愚鈍な」警官たちの場合にそうであったように、隅から隅までしらみつぶしに搜索しても見つからなかった当の「真実」は、目の前にぶら下がっているものだ。ジャック・ラカンの『エクリ』冒頭の「《盗まれた手紙》についてのゼミナール」は、真実の発見の「迂回」、「遅延」という性質そのものが、そもそも真実が自己のありかを示す仕方なのだと示唆している。

われわれはこのような理由から、われわれを導いている対象そのものによってまわり道をしているのだと確信することになります。(ラカン31)

ここには、精神分析で言うところの「抵抗」が働いていると思われる。抵抗は「迂回」、「遅延」を生じさせるけれども、同時に抵抗が存在することになる。ゼミナールの初めに、ラカンは「Verwerfung」、「Verdrängung」、「Verneinung」という言葉をいずれもドイツ語のまま示しているが、これらの言葉は後で言及されるフランス語の「mettre de côté [わきへやる]」あるいは「mettre à gauche [わきにおく、隠す]」に関係している。

結局、mettre de côté [わきへやる]ということが問題になっています。あるいは二つの意味にわたる日常の言いまわしを借りると、mettre à gauche [わきにおく、隠す] が問題になっています。(ラカン31)

『The Purloined Letter』というタイトルの「purloin」という動詞の意味を語源的に遡って、ラカンはこれを「わきへやられた手紙」という意味だと解している。わきへやられた手紙とは、すなわち、抑圧された(＝はねつけられ、排

除され、否定された) 真実である。『O侯爵夫人』においても、真実は遅れて現れるのであるが、それは論理的な推論や分析によってではなく、(主人公にとって) まるで運命の不意打ちといったように訪れる。敢えてラカンがポーの小説のタイトルを解釈した流儀に従って、この作品のタイトルを眺めるならば、ここでは「真実」そのものが問題になっているというよりも、自己の「真実」を覆い隠されているがやがてそれを発見させられる「主体/主観」こそが、問題になっているのだと言えよう。

#### 4. 身体

一人の女性としてのO侯爵夫人が成長し、自立した主体となり、新聞というメディアを通して世間/社会という間主観的な関係性の中に参入していくというフェミニスト的な解釈が、この作品において本当に成り立つかどうかは本稿での主要な関心事なのだが、確かに、作品の前半部、真実が明らかにされる前の侯爵夫人の物語はその線に沿って読み解くことが十分に可能である。しかし、この前半部は、過去の回想、すなわち冒頭で提示された謎としての広告文に関する遡及的な説明という形式を取ることで、現在の物語としての後半部と形式的には画然と区別されている。物語が一巡して冒頭の時間に戻ってくることはシュミットも指摘しているが、彼はそれが何故そうになっているのかということの説明していない。しかし、これまで見てきたことから、女性の自立ということが小説全体のテーマでないかと筆者は考えている。それが限定された主題ではないことを示しているのが、まさにこの過去の報告としての物語と現在の時点での物語の間の形式的な区分なのではあるまいか。(物語が二重の構造を持っていること、それが過去の物語と現在の物語であること、過去の物語が「原因」に関する物語であることなどの点で、やはりポーの『盗まれた手紙』と符合する。)

だが前半部においても、それが一人の女性の物語であるという事実に、作者の女権拡張的な意図があるかという点、それは疑わしい。確かに凌辱による妊娠という、「産む性」としての女性ならではの問題がすべての騒動の中心にあるのだが、しかしその凌辱は気絶して意識を失っているときに生じた出来事であり、侯爵夫人には強姦者の存在を実感することができないのだから、女性の権利の侵害よりも、問題はむしろ、意識と身体上の現実との間のずれを前にして主体が陥る危機の方にある。ホルンが指摘するように、侯爵夫人を慄かせているのは、「自我の継続性に対する疑い」(Horn 87) であり、自分が発狂した

のではないかという恐怖である。この妊娠という身体上の事件において、「産む性」としての女性が象徴する「母なる自然」が問題になっているわけでもない。侯爵夫人の母性が語られている箇所においても、母性の神話化が行われることはなく、むしろ例の劇的アイロニーを用いつつ、突き放した描写がなされている。(子供のことで神秘的な妄想を抱く侯爵夫人の姿は滑稽である。)

身体を問題とすることで自然が問題になっていることは確かであるが、それはおそらくテリー・イーグルトンが『文化の概念』(2000)の中の「文化と自然」という章において指摘しているような仕方においてであろう。文化と自然の間には弁証法的な関係があるとイーグルトンは指摘する。文化を支えている基盤としての自然は、時に文化によって超越されるように見えるが、しかし、文化はやはり自然によって支えられてしか存続しえないものである。精神的な高揚感の中にある人が身体的な痛みを感じないということがある(イーグルトンは信念から焼身自殺によって抗議行動を行う人が痛みを感じない場合があるというような例を挙げている)が、しかし、いかに情熱的であれ、身体をひどく傷つけられれば、当然のことながら死んでしまう。精神は最終的に肉体の死を越えて存続できないのだから、文化は常に自然に敗北せざるをえない(Eagleton 87-88)。そのような、人間の精神の限界を顕にする存在として、身体が考えられているのではないか。

人間は身体を持つ存在であるがゆえに狭い視野の中にあるが、同時に、身体を持つがゆえに真実に出会うこともできる。というか、真実の不意打ちを食らうことができる、とでも言ったらよからうか。そのようなきっかけを与える身体という存在は、同時に内面でもあり、外面でもある。それは「内的な、自分にはあまりにもよくわかっている感覚」(Kleist 23, 26-27)と結びついているのだが、しかし、その感覚はまた、精神にとっては外部からやってくる見知らぬものともいえる。そうでなければ、どうして不意打ちでありえよう。身体が指示しているのは、単なる物質としての肉体ではなく、このような内なのか外なのか分からない地点、自分でありながら自分でない領域である。

## 5. おわりに

以上見てきたところから、『O侯爵夫人』は、シュミットの言うような、当時の啓蒙主義に沿った精神の発展を描いた作品というより、むしろ主体の脆弱で不安定な構造を描いたもののように筆者には思われる。理性の光で暗愚の闇を照らすものとしての楽天的な啓蒙主義が、この物語が最終的に意図するもの

だとは到底思えない。経験によって学び、賢くなって、同じ過ちを繰り返さないようになる、というような教訓をこの物語に読み取ることは困難である (vgl. Schmidt 207)。いまやF伯爵夫人となったO侯爵夫人は、時の流れにつれ、また夫の誠実さに次第にほだされ、彼を赦し、愛し始めるのであるが、それは自分の経験から彼女が何かを学んだからであろうか。いや、確かに学びはした。世界が「脆い」存在であり、完璧さを求めることは到底できないということを。ホルンは、それすらも自罰的態度の至りついたところと見ている（「この物語は、彼女が自分自身に有罪判決を下し、自分自身の良心の冷酷な思い上がりをもとめて終わっている。」 [Horn 86]）。しかし、批評的精神で世界を見、より冷静で醒めた認識に至り、寛容を学び、大人になったという解釈もまた成り立つだろうし、そういう意味では、より理性的になった、成長したとも言えるだろう。しかし、彼女が発見したことそのものは、啓蒙をそもそも不可能なものにしてしまわないだろうか。この脆弱な主体が、世界を闇から解放する「理性」足りえるのかという問いを、それは惹起せずにはおかないのだから。

#### 【引用文献】

\*クライストのテキストはレクラム文庫版を用いた。

Kleist, Heinrich von. *Die Marquise von O.../Das Erdbeben in Chili*. Stuttgart: Philipp Reclam Jun., 1986.)

Eagleton, Terry. *The Idea of Culture*. Oxford: Blackwell Publishers, 2000.

Horn, Peter. *Heinrich von Kleists Erzählungen: Eine Einführung*. Königstein/Ts: Scriptor-Verlag, 1978.

Montaigne, Michel de. *Essais. Auswahl und Übersetzung von Herbert Lüthy*. Zürich: Manesse Verlag, 1953.

Sammons, Jeffrey L. "Jupiterists and Alkmenists : *Amphitryon* as an Example of How Kleist's Texts Read Interpreters." In *A Companion to the Works of*

Heinrich von Kleist. Ed. Bernd Fisher. New York: Camden House, 2003, 21-41.

Schmidt, Jochen. *Heinrich von Kleist: Die Dramen und Erzählungen in ihrer Epoche*. Darmstadt: Wissenschaftliche Buchgesellschaft, 2003.

ジャック・ラカン『エクリ I』宮本忠雄、竹内迪也、高橋 徹、佐々木孝次共  
訳、弘文堂 昭和47年